



2017 年 (平成 29 年)

8月号 (No. 867)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

実務担当者のための「支部事業情報交換・交流会」開催さる

7月8日、本部ルームにおいて北関東・南関東ブロック7支部合同による「支部事業情報交換・交流会」が開催された。各支部の実務者16名が集まって、支部の活性化や会員増強のための事業の企画・立案・実施の方法について情報交換を行ない、新しい事業展開を図るためのアイデアやヒントを共有することができた。

支部事業委員会 武藤篤生

【栃木支部】

近年、支部活動の活性化を図り、会員増強につなげようという試みは、歴代会長の中心施策となっている。ところが、各支部が具体的にどのような活動を行なっているのか、じっくり情報交換する場がなかったのではないか。そのような場をまずは関東地区で設けようということ、賛同者を代表して東京多摩支部の竹中支部長の挨拶ののち、各支部

で行なっている事業が紹介された。

支部設立11年目で、支部には県

岳連に所属する会員も多く、協賛

や共催を通して協力して事業を行

なう機会が多い。支部で行なう事

業は山の日に関連するものも多く、ファミリー登山、クリーンキャンペーンなどの公益事業や山岳映画の夕べ、ヒマラヤの集い(報告会)などがある。

目次

実務担当者のための「支部事業情報交換・交流会」開催さる	1
平成29・30年度新役員紹介	4
さんけん通信	7
支部長が変わりました①	8
自然保護全国集会を岐阜市で開催	10
「山の日」歳事記	11
支部だより	12

青森支部／岩手支部／越後支部	
Climbing&Medicine・79	13
新入会員	16
会務報告	16
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時



様々な支部事業が報告された情報交換会

昨年7月に親子登山教室を開催した。平成24年より毎年開催しているが、県岳連との共催で補助も受けている。12組の親子28名と講師・スタッフ10名が参加し、1日目は学習院大学・光徳小屋に宿泊し、2日目に男体山登山を行なう。

水分摂取のしかた、歩き方、観望望気などは日山協の資格を持つ指導者が、天体観測や植物観察などの自然体験活動は講師・スタッフが指導する。事故などの責任問題に配慮し、子どもだけではなく親子で募集するが、親は口出しせず子ども中心で進めている。参加者には好評で、リピーターも多い。実施の2ヶ月前に新聞、コミュニティ誌など無償のメディアに募集記事を掲載し、県・市教育委員会にチラシを配布して募集する。定員の1.5倍の応募がある。

【群馬支部】

県内での様々な山の事業に取り組むために、JAC群馬支部、県岳連、芳山の山岳3団体が、平成28年に群馬県山岳団体連絡協議会を発足させた。山のグレーディング、ぐ



準備体操の後、男体山に向かって元気に出発(栃木支部)

んま県境稜線トレイル、山フェスタ、山の日イベント、スポーツクライミング振興などの事業に取り組んでいる。

県境稜線トレイルは県が進めるロングトレイル・プロジェクトで、昨年度は谷川岳から四阿山までの100kmを、3団体が分担して調査した。環境省、県、協議会、地元が協議しながら進めている。

「山の日イベント in 谷川岳」はみなかみ町で開催され、昨年からは協議会と地元のエコツーリズム推進協議会との共催で実施している。JACでは山麓の自然観察会を実施した。

【埼玉支部】

平成22年に発足し、現在活動に参加している支部会員は50〜60名である。アンケート調査によると、活動に参加していない会員も支部の活動に関心を持っておりようだ。平成23年より年1回、障害者との「ふれあい登山」を実施している。埼玉県障害者スポーツ協会とともに主催し、障害者スポーツ協会は募集、JACはプランニングと運営を担当している。参加者約100名のうち4分の1が障害者である。JACからは多くの自然保護委員が参加し、歩行時に自然観察の指導などを行なった。

また、越生町教育委員会の後援を受けて毎年「大高取山自然観察会」を開催している。非常に珍しい地層逆転が観察できる。過疎の進んだ地域であり、地域おこしも開催目的の一つである。およそ40名を地学班、植物班、歴史班のカテゴリー別に6班に分け、解説を加えながら観察をする。今後は解説員の養成が課題である。

【千葉支部】

支部の公益事業として、児童養護施設「晴香園」の児童の引率登山を行なっている。晴香園より、支部会員に子どもたちを山に連れて行

ってもらいたいという要望があったのをきっかけに始めた。今年で5年目で、通算17回実施している。施設の児童と職員が中心で、千葉支部のスタッフはその支援・補助を行なっている。今まで大きな事故はないが、責任問題を明確にし、安心して実施できるよう施設と覚書を交わすことを検討している。また、支部として賠償に対する

保険の加入が必要かどうか調査している。委員会が中心となり4名の担当者のほか、ボランティアで実施している。施設の要望が多いので、今年は5回実施したい。

一方、平成24年より郡界尾根(安房国と上総国を分ける尾根)踏破事業を実施している。千葉県は中央分水嶺が通っていないために、平成21〜25年に支部独自の事業として房総半島の分水嶺踏破を行なった。本事業はそれに続く事業で、支部の活性化と支部会員の技術向上、懇親が主な目的である。参加者は原則として支部会員のみ。踏破の暁には、報告書をまとめたい。

【神奈川支部】

昨年発足し、県内在住の会員の内134名が支部会員である。個人情報保護の観点から会員個々の



障害者と手を取り合って歩く会員たち(埼玉支部)

情報は収集せず、会員の属性は把握していない。アンケートなどにより支部会員のニーズを把握しようとしていたが難しく、山行計画が立てにくい。本部や他団体で活動を行なっている会員も多く、支部の独自性を持った活動を確立することが課題である。

本年度、「かながわ山岳誌プロジェクト」を立ち上げた。発足間もない支部活動を活性化するために、1つの目標を定め、多くの支部会員に参加してもらうことが目的である。5年をかけて県内の山・峠・登山対象となるピークのすべてに登り、文化的要素(地形・気象・植生・山岳宗教など)を含めた報告

書を作成する。282ポイントを選定し80コースを設定した。難コースはプロジェクト・メンバーが、易しいコースは支部会員と支部会員同伴の非会員が参加できる。成果は一般に公開し、当支部の存在をアピールすることによって新入会員が増えるのを期待する。

【東京多摩支部】

平成22年に支部が発足し、翌年に支部活性化策のひとつ、公益事業としての若年層対象の初級登山教室開催が提案された。立川市の「たちかわ市民交流大学の団体企画型講座」に応募し、事業実施許可を得、平成24年より「初心者登山教室」を毎年開催している。募集は市



初級登山教室で春の穂高・岳沢へ(東京多摩支部)

が、企画運営はJACが行なうが、新聞への募集案内掲載はJACで行なっている。

3ヶ月間の「初心者登山教室」が終了後、支部独自の18ヶ月間の「初級登山教室」を実施している。1期〜4期の初級登山教室修了生は75名で、その内の50名がJACに入会している。指導内容の統一とスタップ育成のために指導マニュアルを作成し、リーダー研修会などを行なっている。

5周年を機に奥多摩駅近くの会員保有の家屋を借り上げ、ベースキャンプを開設した。稼働率は高くないが、支部行事や個人山行、本部のYOUTH CLUB会員なども利用している。「多摩白山」を選定し、会員が踏破、取材をしてルートガイドを作成している。財政的に出版は難しいが、近日中にウェブにて公開する予定である。

*

各支部の活動報告に対しては多くの質問や意見が寄せられ、いくつかのテーマについて議論が交わされた。

会員増強は各支部共通の最大課題である。各支部とも会員獲得も視野に入れ各種イベントを開催し

ているが、イベントをきつかけに入会に至るケースは少ないようである。登山関連のイベントの参加者は比較的固定されており、すでにいずれかの団体に入っているケースが多く、講演会などでは声掛けの機会が少ないことなどが理由である。

登山教室は受講生と会員の関係を築くのに適しており、東京多摩支部で行なっている登山教室では修了者の多くがJACに入会し、過去6年での退会者もゼロである。非会員が参加できる山行を機会に入会するケースも多い。

従来、若年層の会員獲得を目指してきたが、今後の人口構成において若年層は減少してゆく。高齢者社会を念頭に置きながら、現在の会員サービスを充実させ、どのようにして仲間を増やすかというような観点も必要となってくるであろう。

近年、山岳事故において、特にベテランの遭難事故が多い。安全対策については、多くの支部が安全登山の講習会を実施している。緊急時のマニュアルを作成して訓練を行なっている支部もある。また、支部会員の保険の加入状況を定期

的に調査し、把握している支部もある。支部においても、安全登山への取り組みはさらに重要になるう。

今回の情報交換会において、各支部で抱える課題の多くが、支部会員の獲得と高齢化対策、指導者の育成など共通していることが明らかになった。今回、各支部での取り組みについての意見交換を通じて知識の共有ができた。ここでの成果が、各支部の今後の運営や活性化に役立つことを期待している。ほかの地域でも同様な情報交換会が開催され、多くの支部が活性化されるよう願っている。

【開催データ】

日時・平成29年7月8日(土)午前10時〜午後5時

場所・JAC本部104号室
出席者…(茨城支部)西川元禮、(栃木支部)渡邊雄二、(群馬支部)北原秀介、根井康雄、(埼玉支部)高橋努、高嶋徳紘、清登緑郎、(千葉支部)三木雄三、山口文嗣、(神奈川支部)込田伸夫、井村英明、長島泰博、(東京多摩支部)竹中彰、山本憲一、河野悠二、中原美佐代、(支部事業委員会)重廣恒夫、宮崎紘一、森武昭、節田重節、永田弘太郎、谷内剛、武藤篤生

平成29・30年度新役員紹介

先ごろの総会を経て新たに着任された役員の皆さんに自己紹介をさせていただきます。①会員番号 ②役職 ③担当委員会やPT、WGなど ④好きな山域や登山スタイルなど

重廣恒夫(しげひろ・つねお)

①7931

②副会長

③記念事業委員会、支部事業委員会、海外登山助成審議委員会

④海外登山(年1回)、チャレンジ4000(生涯4000山登山)、関西支部県境縦走

昨年は21年ぶりのヒマラヤ登山で、ナンガマリⅡ峰(6209m)の頂上に立ちました。しかし、加齢による体力や技術の衰えを改めて認識させられた登山でもありました。

少子高齢化が進むなかで、高齢登山者の弱体化による山岳遭難の増加は社会問題ともなっています。山岳会にとっては、団塊ジュニアを中心として新たに登山を始める人を増やすことも大きな課題です。

一方で、山岳団体などの組織登山者の高齢化による事故の増加、ネット登山が拡大するなかでの初心者による事故発生の懸念など、社会環境や生活スタイルの多様性に対応した安全登山の啓発は、課題

も山積しています。

まずは、登山者の高齢化による身体能力の減退認識不足が道迷い・滑落・転倒・疾病による事故を増大させている現実を鑑み、山のグレーディングやテストコースの設定・登山能力の自己認識の方策など、身体能力に併せた目標設定の標準化など、安全登山推進のための施策を模索していきたいと考えています。

野澤誠司(のさわ・せじつ)

①9863

②副会長

③YOUTH CLUB、家族登山普及委員会、医療委員会、山岳研究所運営委員会

東京都出身。高校のWV部で登山を始めました。本当に山が好きなので、以来42年間プランクなく、すべてのジャンルで登り続けています。昔は主に学生部指導と遭難対策で活動してきましたが、YOUTH CLUBができてから、

本会の心棒になる「青年部」の再建と、大きな土台になるWV部の構築に取り組んできました。

若い会員にはいろいろなジャンルの登山を経験してもらって、早く自分に合ったジャンルの登山を見つけて、突き詰めていってもらいたいと思っています。そうすることによって登山が上手になり、登山寿命が延びます。高齢化で収縮していく登山界にあつて、本会だけが唯一、すべてのジャンルの登山を安全・確実に展開していければいいな、と思っています。

古川研吾(ふるかわ・けんご)

①15888

②常務理事

③財務委員会

④近郊の日帰り登山に始まって、休暇が取れたときは縦走と頑張っていました。最近バックカントリー・スキーに重心が移ってきています。

30代後半になって体験したファミリー・キャンプからアウトドア活動を始めました。それから自転車、カヤックと変遷し、子どもたちがクラブ活動などで一緒に行動できなくなるころから登山を始めまし

た。

山岳会に所属したことがなく、我流であちこちの山域に出かける休日を通していました。これからは少し体系だった登山を学びながら会務をこなし、皆様のお役に立てるよう頑張りたいと思います。

永田弘太郎(ながた・こうたろう)

①12319

②常務理事

③総務委員会、DM委員会、59

9ミュージアムWG

④ハイキングが主で、常におもしろさをプラスするよう心がけています。

山のバス時刻表を作っていたとき、仕事で知り合った人に紹介され入会しました。若いころから山に登っていましたが、山を知ったのは入会後で、諸先輩に多くを教わってきました。在籍20年、総務委員会を中心にいくつかの委員会や同好会に属してきました。

日本山岳会には私にとって非常に居心地が良く、いつまでも続いて欲しい世界です。ですが、その先行きは芳しくありません。YOUTH CLUB活動や支部活性化などによって目先の沈没は回避で

きそうですが、将来の見通しは立っています。ブラックと揶揄される(一)理事会ですが、見晴らしのいい尾根に出るまでやってみようと思っています。入会してくる若い人たちのためにも、会を永きにわたり存続させたいと考えています。

安井康夫(やすい・やすお)

①8494

②理事

③山岳研究所運営委員会、国土地理院WG

④アルパインスキークラブで山スキーを楽しんでいます。

名古屋出身。中学2年のときに博多へ移住、高校山岳部時代に岩登りがしたくて、卒業するとすぐに福岡市内の山岳会に入会しました。1973年10月にまだ解禁されていなかったチョ・オユを偵察後、故・新貝勲さんからJAC入会を勧められて、1978年に入会しました。

大阪に転勤して関西支部に移籍、総務委員を担当するところから登山観が変わり、転勤で各地を回るたびにJACの皆さんとのお付き合いが広がっていきました。

アルパインスキークラブへの入会、そして山岳研究所運営委員、同委員長を担うことになり、上高地の関係者の方々と交流ができたことは大きな財産です。これまでの経験を活かして会員の方たちとの触れ合いをさらに広げ、会務を通じて活性あるJAC活動に力を注ぎたいと考えています。よろしくお願いします。

齋藤 繁(さいとう・しげる)

①14143

②理事

③医療委員会、科学委員会

④谷川岳をはじめ、アプローチの容易な群馬の山々を中心に活動しています。

野口いつみ前理事の後任として、医療委員会と科学委員会を担当させていただきます。本業は病院の手術室、集中治療室勤務で、重症な患者さんや痛みに苦しむ患者さんの診療にあたっています。現在、日本山岳・スポーツクライミング協会の登山部医科学委員会委員長、日本登山医学会の事務局長も兼務しており、山岳関連団体医療分野の横断的交流に貢献できれば、と思っています。

また、医療委員会では野口前理事、浜口前委員長の下、健康管理に関する講演会やメデイカル・ハイキングなどが企画されてきました。日本山岳会の社会貢献事業として、こうした活動が定着、発展するように非力ながら尽力させていただきます。

さて、以前から自分自身の健康管理に登山をうまく活用しようと考えていましたが、縁あって本会、神長幹雄常務理事のご支援の下、『病気に負けない健康登山』『体の力が登山を変えろ』という健康増進啓蒙書を山と溪谷社から、『山登りの健康管理の秘訣』という健康管理指導書を朝日印刷から出版させていただいております。今回の理事担当を機に日本山岳会の「健康増進登山」推進に貢献できれば、と考えています。

清登緑郎(きよと・ろくろ)

①8612

②理事

③山行委員会、「山の日」事業委員会

④北ア・南アの縦走。北海道や東北の山々。

学生時代、冬の八ヶ岳を硫黄岳

から編笠山まで縦走して、山の魅力にとりつかれてしまいました。以降、北ア・南アの縦走を中心に山行を重ねてきましたが、大した山歴もなく、平凡な登山者の一人です。

損害保険会社に就職後も転勤先の山を楽しんできましたが、定年後、日本山岳会の活動に参加したくなり、山行委員会(旧・集委員会)に所属して、「安全に楽しく、全国の仲間と一緒に、憧れの山に登ろう」をモットーに、全国各支部の、主に中高年の皆さんと一緒に山登りを楽しんできました。

理事業務は初めての経験ですが、で、分らないことばかりですが、安全第一で楽しい山行を数多く、会員の皆さんに提供することが当面の課題かと考えています。そして、そのことが仲間を増やしていくことにつながっていくと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

近藤雅幸(こんどう・まさゆき)

①14972

②理事

③図書委員会、自然保護委員会、森づくり連絡協議会、高尾の森つ

くりの会

④破線のない山、沢など人が行かない山。山の自然や文化にも惹かれています。

初めて登った山が中学生のときの御前山です。以来、山に取り付かれて数十年。今や趣味の域をとくに超えて、山は人生そのものになってしまいました。その間、山から受けた恩恵は数知れません。その恩返しとして、山の自然環境保全を考えること。それは、私が山に行く限りは心に留め置かなければいけないことだと思っています。

そんな私が日本山岳会に入会したのは、図書室にある山の書籍を読み始めたため。念願かなって初めて図書室に入ったとき、日本で有数の蔵書コレクションに圧倒され、日本山岳会の歴史と先輩たちの蒐集の努力に感動したのが、その後の会での活動を決定付けました。

今回は理事として自然保護、森づくり、図書を担当することになりました。いずれも日本山岳会の社会貢献と文化の柱になる活動です。浅学非才な私にどこまでできるかわかりませんが、常にその重

さを胸に置いて仕事をしていくつもりです。

波多野あをい(はたの・あをい)

①15208

②理事

③YOUTH CLUB、家族登山普及員会

④夏季は縦走、冬季は山スキー

飛行機で偶然通りかかったK2の頂上を見て、山に魅了されました。それから随分たちますが、仕事や子育てが落ち着いて、登山を始めました。

現在、YOUTH CLUBのWV部に属しております。委員会では家族登山普及員会の担当理事で、主に「山ご飯」を担当しています。同好会ではバックカントリースクラブに所属しています。スキーで登山をするということにとっても憧れ、スキーを始めました。

WV部が発足してはや5年。現在、WV部員は187名で、そのうち女性が88名になりました。登山経験の深い方から浅い者まで、いろいろなメンバーがおりますが、講習会や縦走クラブを通じて挑戦し、指導していただき、ともに日々成長しております。また、目標を

持つて頑張っております。

長い歴史のある山岳会の門戸を開き、受け入れていただいたことに感謝し、ワンゲル目線、女性目線の声をお届けし、橋渡しできれば、と思っています。どうかご指導、ご支援をお願いします。

石川一樹(いしかわ・かずき)

①11022

②監事

高校・大学と山岳部に所属していました。当時(1970年代前半)は、講義への出席もあまりうるさくなく、年間120日くらいの山行をしていました。1991年に母校の監督を引き受け、このとき日本山岳会に入会し、青年部にお世話になりました。

2年前にリタイアし、気ままに年間20回くらいの山行をしています。少しでも会のお役に立てれば、と思います。どうぞよろしくお願いします。



さんけん通信

雨の日の山研で思うこと

山研管理人 元川里美

雪と氷で冷え切った山研を開所してから早くも3ヶ月がたち、上高地でも梅雨明けして夏山シーズンを迎えました。都会よりも10度Cは気温の低い上高地ですが、この時期はさすがに寝苦しく感じられる夜もあり、窓を少しだけ開けておくと、ヨタカのかすかな鳴き声と、夜の森に漂う独特の香りが、ひんやりとした空気とともに枕元まで流れ込んできます。

上高地の夜をいつもこうして心地良く過ごせばよいのですが、つい先ごろの大雨のおりには、ひと晩中降り続く雨にまんじりともせず、かといってどこかへ避難するというほどでもなく、軒に跳ね返る雨音にただ耳を傾けながら布団の中で夜明けを待っていました。

このとき、越後支部の焼岳公募登山隊が、雨量規制のために上高地入りを阻まれてしまったことは「さんけんブログ」にも少し書きましたが、梅雨時に限らず、上高地ではこのように雨が続き、周囲の沢という沢から流れてきた雨水

が梓川に集まり、徐々に水位が上がっていきます。山研の背後を流れる善六沢もいつになく増水し、こぶし大の石を次々と山研の前まで運び下ろした後、小さなしぶきを上げながらヒタヒタと治山道を横切っては梓川の濁流へと吸い込まれていきました。

上高地を離れて地元に戻っていた3年前、管理人研修として何度か山研に通っていたのですが、あるとき、ふらりと外に出て治山道から山研をまじまじと眺めているうちに、山側から下ってくる緩やかな傾斜が、善六沢の扇状地の一部であるということに今さらながら気づいて「おや」と思ったことがあります。ただ、正面側にはまだ細い先駆植物のハンノキがあるものの、立派なサワラやイチイが建物を取り囲んでいるところを見ると、どうやらそうしばしば土砂崩れや大水に脅かされる場所というわけでもなさそうです。

それでも、上高地の美しい風景をつくり出す要素としての水は、

ときに木々を根こそぎ洗い出し、巨岩を押し流すほどの力を秘めています。ふだんは穏やかな善六沢も、そこが水の通り道である以上、雨の降り方によってはどのように変化するかは分かりません。山研を管理するということは、不意に起こる自然現象に対する危機の管理でもあるということを、改めて覚悟した瞬間でした。

毎年、梅雨の間に実施されている上高地消防隊の訓練が今年も行なわれ、各施設から選任された隊員たちが規律訓練やAED研修を受けました。山研の隊員は必然的に私になりますので、勇ましい男性陣に混ざって一緒に訓練を受けさせていただきました。

そのときに隊の幹部が述べていた「それぞれ自分たちのお客様は、自分たちで守れるようにしておかなければ……」という災害時の基本姿勢は、上高地のような場所では当然といえば当然のことなかもしれません。いつでも司令塔が存在しているような現在の社会システムにすっかり慣れてしまっている私には、とても新鮮で明快に響きました。食料備蓄などは言うまでもなく、万が一の状況下で

は、誰かの判断を待つのではなく、自分の頭で考えて最善の選択をせよ、そのことを日ごろから意識しておくように、ということなのだと思っています。

梅雨明けの気配が漂い始めたころ、立ち昇る草いきれに誘われて外を歩いていると、水力小屋へ続く小径の脇の、大きなハルニレの根元で、3株のショウキランが盛りとばかりに咲いていました。昨年までは気づかなかった花です。またひとつ、山研植物リストに名前が増えました。

自然の怖さと優しさに一喜一憂しつつ、今年の山研ライフも折り返し地点を通過するところです。



山研の庭で咲いたショウキラン

支部長が変わりました①

青森支部 中村 勉さん

このたび青森支部長に就任しました中村勉です。1993年の支部設立時、初代松島支部長に依頼され会員にアンケート調査や設立に向けた活動を手伝い、初期の事務局長を、そして副支部長を担当していました。

幼稚園のころから山好きの叔母に連れられ里山で遊んでいました。1976年、八戸工業高校山岳部OBを主体とした「八戸ヒマラヤ遠征隊」を結成し、インド、ナン

ダ・デヴィ山群のドウナギリ峰(7066m)に遠征しています。結果は後200mを残し失敗しました。

ちょうど時期を同じくして、JACがナンダ・デヴィの初縦走に挑んでいました。山全体に響くヘリコプターの音は、谷底深く飛ぶ



青森支部長 中村 勉さん

インド陸軍の双発ヘリ。日・印合同隊としてのJACの力強さを感じました。

帰国後、遠征隊の隊長で恩師でもある加賀勝氏の推薦をいただきJACに入会しました。

「山の日制定 親子登山」は当支部にとりましても重要な行事です。子どもたちにワクワク・ドキドキする冒険心を育み、また山に行きたいと思わせる動機付けが必要だと思います。

来年は25年の節目を迎えます。その間「白神山地ブナ再生事業」「八甲田山登山道整備」「八甲田山遭難防止ポール立て」など、地元に根差したボランティア活動を行なっています。しかし、支部の問題としては「会員の高齢化」「減少」「金太郎あめ組織」などです。本年度の目標として新入会員3名を確保し、リーダーの育成を図ります。懇談・懇親のなかに会員としての自覚や情報の共有を促し、ミニ講演会などを通して支部の活性化に努めたいと思います。引き続きのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

宮城支部 富塚和衛さん

このたび宮城支部長を仰せつかりましたが、元より歴代の支部長に比して山歴の浅い私には、山に関する知識も技術ありません。したがって、宮城支部の運営に当たっては、会員、準会員、支部友の皆様方、および本部並びに各支部など関係各位のご理解とご協力なくしては、この大役は務まらないと考えます。この点を「付度」いただきながら支部運営に当たっていきたく思っております。

私の生まれ故郷は秀峰・栗駒山の麓の築館町です。登山に目覚めさせてくれた最初の山は、標高が東北一の山でもある燧ヶ岳でした。40代前半のある年の夏に、女房と尾瀬ヶ原の散策旅行に出かけたことがありました。2日目の朝早く、山小屋を出発して尾瀬ヶ原に向かったおり、我々の前を60代のご夫



宮城支部長 富塚和衛さん

婦が歩いていました。そのご夫婦が林の中で道を右にとられたのですが、後を付いていつてしまったのです。その道は燧ヶ岳へ続く登山道だったのですが……。

結局、苦勞しながらも燧ヶ岳の山頂まで登ってしまつたのです。このときに肌で感じた山の涼風の清々しさや可憐な高山植物、そして、なんとと言っても山頂にいた山人の心の優しさ、深さに感動したのでした。それは疲れ果てた我々に、山では何よりも大切な「命の水」を分けてくれたのです。これを機に、我々は狂ったかのように全国の山々を駆け巡り、また、夫婦会員としてJACにも入会、山との関わりを続けてきました。

宮城支部を取り巻く環境も年々厳しさを増し、会員の高齢化と減少は、いかんともし難いところがあります。しかし、それに挫けることなく、多くの県民に「山」への関心を持つてもらえるような公益事業の、さらなる工夫・充実に鋭意図る必要があります。これが将来大きな幹になることを信じて、安全で明るく楽しい山に関わる事業を、力を合わせて推進していきたいと思っております。

支部長が変わりました①

山形支部 野堀嘉裕さん

私は1951年、東京都葛飾区、フーテンの寅さんでおなじみの柴又帝釈天のそばで生まれました。山とか森とかが近くに全くない所で、光化学スモッグが毎日発生していた時代に育ったので、興味を持ったのは自然環境の変化でした。登山は都立両国高校在学中に同窓生と丹沢に行ったのが始まりです。その後、日本大学、山形大学、北海道大学で森林科学を専攻したため、趣味の登山のほか、調査研究のために国内外で山行を行なってきました。

職業は王子製紙林木育種研究所研究員、東北大学を経て山形大学で教育研究に携わってきました。本年4月から山形大学の名誉教授となり、研究分野の森林科学に関する著書、論文も多数あります。



山形支部長 野堀嘉裕さん

1968年から75年までの主な

山行経歴は八幡平、奥穂高岳、白馬岳、唐沢岳縦走、屋久島・宮之浦岳、冬季八ヶ岳・横岳、針ノ木岳、立山、北岳で、1977年北米大陸国立公園視察、1991年カナダ北極圏アクセルハイベルグ島ほか化石林調査、1992年ヨーロッパ・アルプスのブライトホルン、2009年からモンゴル国フブスグル県で森林バイオマス調査を行なってきました。1980年代以降は毎年、鳥海山や月山、朝日連峰、蔵王山など山形県内の山に登っています。

2005年から退職まで「山形大学自然に親しむ会」の顧問を務めました。若い人たちの登山への考え方が昔と違ってきたと感じます。登山ブームが再来していると言われる反面、山岳会への加入が進んでいないのは、この点を理解していない山岳会側の体制にも問題があるように思われます。私の日本山岳会への加入は2012年で、まだまだ新入会員です。山形支部のメンバーも高齢化が進み、新会員の確保は至上命題です。会員確保が支部長の大きな課題と言えるでしょう。

群馬支部 北原秀介さん

6月14日の理事会にて群馬支部長に承認されました。青春時代の体重は現在より10kg以上軽量で、剣岳や滝谷の岩と氷雪に親しみ、さらに地質学を専攻したことから南八ヶ岳を研究フィールドに選び、行者小屋に居候しながら沢・尾根のすべてを踏破しました。

25歳のときに青函トンネルへ赴任し、夏冬ともに大千軒岳を休日の安らぎの場としていました。そのおりに14代会長の佐々保雄先生を大千軒岳にご案内したのが縁でJACに入会しました。その後、機会あるごとにヨーロッパ・アルプスやチベットのネパールのヒマラヤに接してきました。

群馬県は山岳で囲まれているにもかかわらず、支部設立が非常に遅かったと言えます。その理由は、県内から多くの登山家を輩出して



群馬支部長 北原秀介さん

おりますが、いずれも岳連所属での活躍であり、強いてJACの必要性がなかったと考えられます。そのような環境下、本部の指導もあり2013年7月に、田中壯信・八木原昭明両氏が中心となり群馬支部が設立され、今年で4年を迎えたところです。

支部活動は両氏のご努力の甲斐があつて、順調に軌道に乗れたと思います。さらに群馬県の特徴としては、昨年4月に「群馬県山岳団体連絡協議会」が立ち上げられたことです。この組織の目的は、JAC群馬支部、群馬岳連、労山の3団体が、山岳に関する大きなイベントを共同で企画・運営することにあります。昨年は群馬県の山85峰のグレーディングを発表し、来年開通を目指す「ぐんま県境稜線トレイル(仮称、全長100km)」の調査も行ないました。

群馬支部は、年間6回の支部山行のほか、昨年は69歳でマナスルに登頂する会員もいる個性豊かな集団です。今後も設立時の理念を忘れずに、個々が積極的に活動できる場を維持し、同時に入会希望者の増加を期待できる環境づくりに尽力したいと考えております。

REPORT

自然保護全国集会を岐阜市で開催

自然保護委員会委員長 川口章子

2017年度自然保護全国集会
が7月9日(日)～10日(月)、岐阜市・長
良川河畔の「十八楼」で開かれ、来
賓、本部自然保護委員会、18支部の
委員長・自然保護委員会・会員・関係
者ら100人を超す参加があった。

本年度のテーマは、岐阜支部か
らの提案で「外来種に怯える山の
植物たち」で、田中澄江さんが花
の「百名山の一つにたたえた「伊吹
山」の外来植物について講演、意見
交換が行なわれた。

7月9日／支部報告・基調講演・
分科会・懇親会

午前の部は全国からの参加者が
集まれる11時に開催。進行は自然
保護委員会担当の近藤雅幸理事が
務め、山田和人実行委員長が「外来
植物が山の植生にどのような影響
を与えているか、どのような問題が
起きているのかを考え、討議をし
たい」と挨拶で呼びかけ始まった。

全国集会の重要な柱である全国
各支部の自然保護委員会の活動状
況や課題などの報告があった。

支部報告は北海道、宮城、群馬、
埼玉、千葉、東京多摩、越後、富
山、石川、信濃、東海、京都・滋
賀、関西、四国、北九州各支部の
自然保護委員会会員のメンバーが、
それぞれの地域で取り組んでいる
活動や直面している課題について
発表された。

なかでも石川支部の「白山の外
来植物分布パターン」は、今回のテ
ーマと重なる外来種の除去活動の
報告であった。また、野生動物の
増加、被害状況の報告も多くの支
部からあった。

昨年の反省を踏まえて今年度は
約2時間弱の時間を設定した。岐
阜支部には、支部報告が基調講演
や翌日のフィールド・スタディに
つながったことと、時間的なゆと
りを配慮していただいた。

午後の部は14時から開催、公益
目的事業として計画。一般参加者
を迎え、谷内剛・日本山岳会常務
理事の挨拶、来賓の中部森林管理
局計画保全部・江坂文寿部長の祝
辞、岐阜森林管理署・藤村武署長



清水政美氏による基調講演

の紹介があり、基調講演「伊吹山の
外来植物」を財団法人自然学総合
研究所・清水政美主任研究員がス
ライドを使って始められた。

伊吹山の外来植物は1568年、
織田信長がポルトガルの宣教師に
伊吹山で薬草を栽培することを許
可し、約3000種の薬草外来種
が移植されたと伝えられていて、
江戸時代には、伊吹山で採取され
た薬草が幕府への献上品になって
いた。伊吹山に持ち込まれたり、侵
入したと思われる外来植物の歴史
は古く、現在も多く外来種が確
認され、在来種への影響が少な
く生じている。ちなみに、ポル
トガル宣教師が持ち込んだ薬草で

現在も伊吹山で見られるのはキバ
ナノレンリソウ、イブキノエンド
ウ、イブキカモジグサの3種である。
在来種を守るためには保全は大
事なことで、地元の守る会などが
協力し合って外来種の除去を実施
しているが、登山者による持ち込
みが登山道沿いに多く見られる、
と指摘された。

今回、外来種の問題を全国集会
のテーマとして取り上げたのは良
かった、と参加者からの声があった。
16時からは参加者が3グループ
に分かれて分科会を実施。

①「高山帯での課題」を植生の研
究モニタリング調査等をされてい
る西條好迪・岐阜支部自然保護委
員が、②「亜高山帯」を下野綾子・
東邦大学理学部生物学科講師で自
然保護委員会が、③「山地帯での課
題」を清水政美講師が担当。

各分科会では担当者から話題、
問題等の提供、参加者との意見交
換が活発に行なわれた。その後、3
分科会の報告をして18時終了。
19時30分から懇親会で交流を深
め、21時30分に終了。

7月10日／フィールド・スタディ
日本百名山、花の百名山の伊吹



清水講師らの解説で楽しんだ観察会

山での観察会を実施。岐阜市から伊吹山への交通が不便なので、貸し切りバスで宿舎から伊吹山山頂駐車場まで、8時出発で向かう。鵜飼い船でにぎわっていた長良川沿いを走り、岐阜支部自然保護委員会・藤田委員長らの案内で岐阜の歴史、名所の話に耳を傾けていると雨粒がフロントガラスに。両側の植物に目をやり、観察がすでに始まっているバスは、伊吹山ドライブウェイに入ると、話題になっている「子鹿を襲う空のハンター・イヌワシ」を撮影したハ合目の撮影場所を通過。カメラを抱えた撮影者が並ぶはずが、雨で1人もいなかった。

バスを降りると霧雨の中。雨具を着けて52名は西遊歩道から山頂を目指して出発する。約40分で頂上に到達するコース上で、清水講師、西條委員、下野委員の周りを囲み観察を始める。

アカソ、テンニンソウが多く見られたが、アカソは山頂のシモツケソウを脅かす植物。シモツケは見られたがシモツケソウはなく、違ひはシモツケが落葉低木、シモツケソウは多年草で、日本の固有種と説明があった。

伊吹山もシカの害があつて、シカ柵が設置されていた。木道の両端には外来種のヒメジョオン、セイヨウタンポポが生え、登山者が持ち込んだのが繁殖したとのこと。

山頂まで2時間ほどかけて到着し、昼食を済ませる。山頂のお花畑はまだ早かったのか、イブキジャコウソウやイブキフウロウもやつと見つけた人が皆に伝え、観察することができた。

中央遊歩道の最短コースを下山し、予定の時間より早く帰路につけた。解散はバスの中だった。充実した集会を支えてくださった岐阜支部の皆様、篤くお礼申し上げます。

「山の日」歳事記 八月 古代万葉ひとつとつての山 小考



大和には群山あかど
とりよふ天の香具山
登り立ち国見をすれば
国原は煙立ち立つ
海原は
鷗立ち立つ
うまし国ぞ蜻蛉島
大和の国は

▲右の《うまし国そ大和の国》は万葉集(2)の舒明天皇の歌。これが大君の望国の象徴的な儀式としての御歌とすれば、自然との霊的な交感が豊かであった時代、大君の宣(の)る言葉に応え、自然はたとえ雲に満ちていたにせよ、雲散霧消、「うまし国」の鮮やかな全貌を現前させたに違いありません。

三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなまかくさふべしや(同18、額田王)

▲ここでも女性歌人王(おおきみ)の、飛鳥を離れる惜別と歎きの言葉は、山と雲、自然に届いたことでしょう。作歌、表現上の言葉の強さがそれを語っています。

▲地方官の越中守に任じられ傷

心のなかにあった大伴家持は、神々の命溢れる立山連峰から生きる力を与えられ、立山に寄せる短歌を詠んでいきます。
立山に零(ふり)置ける雪を常夏に見れども飽かず神(かむ)からならし(同4001)
夏でも白く輝く立山連峰に神格を感じ、いつもここに来て山を眺めていたい、というのです。

山の命と人々の命が交感し、互いにその力を増幅し合った万葉びとたちは、繊細かつ豊かな心で山と向き合っています。かかる情景は、千年余を遥かに経て、祝日「山の日」を持つに至った我が国の国びとに、まこと、ふさわしい古代からの遺産、恵みではないでしょうか。(丸)

*版画2点は宇治敏彦氏の『木版画 萬葉秀歌』(厚徳社)より



支部

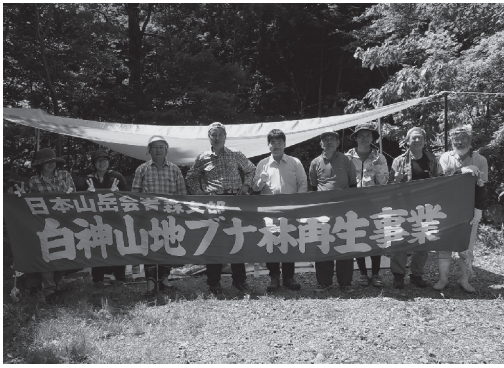
だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

青森支部

白神山地ブナ林再生事業
& 自然観察会の報告

白神山地ブナ林再生事業は、日本山岳会創立100周年（2005年）の記念事業の一つとして位置づけられ、(社)国土緑化推進機構「緑と水の森林基金」の助成を受けて、1999年9月から始まった。



ブナ林再生事業開始前の記念写真

原則年2回春と秋に実施し、今年の6月で足掛け18年、合計30回の作業となった。作業に関わった人員は延べ9000人を超える。今回は参加者が9名と少なかったが、天候にも恵まれ、予定どおりの作業をすることができたので以下に経過を報告する。

6月24日

8時・弘前駅城東口集合、出発。
9時30分・アクアグリーンビレッジANMONで八戸・十和田からの参加者らと合流。

10時20分・奥赤石ゲートで津軽白神森林生態系保全センターの寺田所長より安全指導を受けてから入山。

11時10分・キャンプ地到着、テント設置、各自昼食。

13時・作業開始。今回初めて参加する人に、ブナの木や葉の説明をし、下草刈りを手分けして行なう。下草刈りが済んでから、植樹した



木漏れ日の森の中での休息

ブナの生育状況を調べ、前回のデータ（3年前）と比較する。1m以上も伸びている木もあれば、ほとんど成長していないものもあり、個体差が大きい。

16時・作業終了。今回参加できなかった旧岩崎村の鹿内さんからの差し入れのタコや各自持参のツマミや飲み物を出し合い懇親を深める。夜の帳が降りれば、頭上には満天の星空が広がり、人工衛星が行き交うのがよく見える。

6月25日

7時・自然観察班はクマガラの森に向けてキャンプ地を出発。

7時30分・急坂を登り切り、通称岩木山ビューポイントに到着。少

し霞んでいるが霊峰岩木山の姿が拝めた。

8時20分・世界遺産核心地域に入る。

9時・クマガラの森に到着。風もなく木漏れ日に輝く静かな森の中でしばし休息。水場まで下り、冷たい水で喉を潤す。

9時30分・クマガラの森出発。

11時30分・キャンプ地到着。昼食後、撤収。

13時10分・奥赤石ゲートで解散。

（須々田秀美）

Climbing&Medicine・79

登山家の呼吸、忍者の呼吸

齋藤 繁

登山家の呼吸に関するコメントの代表として、1978年に無酸素で標高 8848mの頂に到達したハーベラー (Peter Habeler) とメスナー (Reinhold Messner) の、“私たちは数歩進むごとにピッケルにもたれかかって、十分な呼吸をしようと口を開けてあえいだ (After every few steps, we huddled over our ice axes, mouths agape struggling for sufficient breath)”という言葉がある。肺の中の二酸化炭素を一生懸命吐き出さないと酸素を取り込む圧力の余裕が肺胞内に確保できず、生存が困難になるという、呼吸生理学的に貴重な体験談として登山医学の教科書に引用されている。

高所に行かなくても、山を歩きながら運動と呼吸の関係を実感する場面は少なくない。たとえば、平らな所でゆっくり歩いているときは、結構な速さまで口を閉じたままで歩いていられるが、山の登りでは大して速く歩いていないのに、口を開けて呼吸をしたくなる。これは、単位時間内に呼吸する体積を大きくするために、呼吸の抵抗を減らしたくなる衝動と考えられる。鼻を通して呼吸した方が、ホコリやばい菌が肺の奥に入りやすく、また吸い込む空気の加温加湿には有利だが、呼吸抵抗が大きくなり、呼吸のための筋肉も疲れてくる。それで、口を開けて呼吸してしまうわけだ。

呼吸のための筋肉を鍛える方法として、マスクをしてのトレーニングがある。呼吸筋の鍛錬用に、マスクの脇から空気が流れ込まないように工夫した特殊なマスクが市販されており、呼吸抵抗を何段階かに調整できるものもあるようだ。無理



【筆者による「水道の術」再現実験】竹筒の死腔（肺の奥まで届かずガス交換に関与できない空気（体積）付加と水圧による胸郭圧迫により水深 50cm ぐらいより深くなると、ほとんど呼吸できなくなる。忍者はよほど呼吸のための筋肉を鍛えていたのか？

のない範囲で、マスクをしての登山にチャレンジすると、気道の通りやすさの重要性や呼吸筋の筋力の意義が再確認できるだろう。

ところで、日本の誇る特殊部隊、忍者軍団は戦国時代の厳しい環境の中で生きるか死ぬか、の正に体を張った諜報活動を実践していた。隠密の掟により、その秘技の多くは消滅してしまったが、『萬川集海』、『正忍記』、『忍秘伝』などに忍者の秘技の概要が記されている。呼吸法に関する記述としては、「水道の術」の際の竹筒を通した呼吸法（ガス交換に関与しない死腔が大きくなり、実は効率的な呼吸は困難だが……）、睡眠中の敵の脇を通過して文書を盗み出す際の「無息忍（音を出さない呼吸法）」、重要な敵方の情報を速く届ける際の「二重息吹（長距離走のための呼吸法）」など興味深いものがある。厳しい登山と同様に、究極の諜報活動では呼吸の制御が重要であったためと考えられる。

（群馬大学大学院医学系研究科）

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

岩手支部

第33回東北・北海道地区 集会報告

遠野物語には、大昔、母の女神が3人の娘を伴って遠野に降り立った、という遠野三山に関わる話がある。女神は「今夜、胸に置いた花（山）をそれぞれに与えよう」と告げた。長女は六角牛山を、二女が石上山、早池峰を三女がもうのだが、実はその晩、長女の胸に置かれた美しい早池峰を、ちゃっかり屋の三女が六角牛と交換していた、というオチがつく。遠野市は北上山地中央部に位置する盆地であり、東日本大震災で被災した釜石市と隣接していることから、復旧支援の拠点となった城下町である。

岩手支部主管の第33回東北・北海道地区集会は、梅雨入り前の5月27、28日に開催した。駅や商店街からやや遠いが、市の浄水場を活かした庭園や南部曲り家を移築した「たかむろ水光園」を貸し切り、翌日、六角牛山登山と又一ノ滝を記念山行とした。

初日は支部長会議でスタート。各支部の事情を交換したのち、次



勢ぞろいした参加メンバー（たかむろ水光園で）

回開催を山形支部主管と決めた。北海道2、青森8、秋田9、宮城5、山形6、福島11の41名プラス岩手支部から宿泊16、日帰り4の合計61名という参加者で全体集会を行ない、岩手県山岳協会・高橋時夫会長から歓迎の祝辞をいただいた。

記念講演は、元朝日新聞盛岡総局長の木瀬公二氏による「遠野の山々と遠野物語」である。木瀬氏は昭和23年東京生まれ、北海道や東北の支局勤務を広く経験されたジャーナリストだ。都会の空気は健康に悪いと、8年前から終の棲家と決めた遠野市宮守町に住んでおられる。著書の『100年目の遠

野物語119のはなし』を読み、私は直接お住まいを訪ね、今回の講演を依頼した。

遠野物語には19の山名が数えられるという。六角牛は、六皇子とか六神石とも書き「あの山には6人の貴い神様が住んでいるから大切にしない」と伝えられているとのこと。ほかに、六角牛山麓のオオカミが馬を襲う話もある。人々は山からの水や薪で生活し、おそらく閉鎖社会であったため、奇怪な民話が多く生まれた。一方、修験者や三山詣りで、外の文化情報を得ていた。遠野のような山に囲まれた暮らしぶりには、岳人にとって身を乗り出すような世界観が広がり、興味深い講演となった。かつて岩手支部の設立に奔走した故佐藤敏彦氏（山岳民俗研究家）が、北上山地とフォークロアを交えた『かぬか平の山々』（1988年・日本山岳会岩手支部編）を出版した経緯もあって、この度の集会を遠野つくしで企画できたことは幸いであった。夕食膳の前の20分間、遠野物語の怪奇談を「語り部」から演じてもらい、一同がぞくぞくと身震いしたところで乾杯という段取りであった。

翌日、曇り空の中、Aコースはバスで青笹町糠前にある六角牛神社から狭い林道に入り、峠登山口（駐車場）を9時に登山開始。確実なペース配分の下、2時間で六角牛山山頂へ。標高差600m。ぬるぬる滑る大岩が重なった急登続きのコースなので、健脚者向きと案内してある。今回は曇天に終始したが、民話の遠野三山の一つを踏査したということで、満足いただいたと思っている。

Bコースは、又一ノ滝への散策である。高僧が「那智の滝は天下一であるが、これも又一番」と命名したという。早池峰山の前山である薬師岳登山口へ移動し、10名のメンバーで小1時間歩き、滝と森を堪能していただいた。その後Bコースでは、古色蒼然とした圧巻の早池峰神社を参拝し、遠野物語の奇岩「続石」を見学するなど、特別メニューも添えた。

健脚Aコースと散策Bコースとも、自己選択での募集である。昨年来下見登山を数回繰り返し、先導には細心の注意を払ったが、多人数での登山ほど難しいものはない。予期せぬ事態には、岩手支部の中屋ドクターに対処してもらい、

計画どおり終了。参加者各位のご協力に感謝しつつ、どんと晴れ！解散となった。（阿部陽子）

越後支部

第60回高頭祭と弥彦たいまつ登山祭

高頭祭は、越後長岡出身の日本山岳会創立メンバーで、第2代会長を務めた高頭仁兵衛翁の遺徳を偲ぶ行事である。毎年7月25日に開催し、今年は60回目の節目となる。弥彦たいまつ登山祭と同時開催し、半世紀以上に継続実施してきた主要行事である。また、昨年から8月11日に国民の祝日「山の日」が施行されたが、新潟県的主要山岳団体である日本山岳会越後支部と新潟県山岳協会は、例年7月25日に新潟県登山祭として実施している「高頭祭」と「弥彦たいまつ登山祭」を山の日記念行事として取り組んできた。

越後人の崇敬を集める弥彦山（634m）で開催され、過去に雨天などで中止したことはなく、新潟県の梅雨明け宣言を告げる名物行事でもあった。しかし、今年は天候不順により、前日には弥彦山

対岸の佐渡地方に「50年に1度の記録的豪雨」という特別警報で、新潟県域も大雨洪水注意報が出されていた。25日朝も土砂降りの雨で、弥彦山スカイラインも土砂崩れで通行止めとなる状況であった。

今年度の来賓は日本山岳会会員で、全国山の日協議会評議員の梶正彦氏と日本山岳・スポーツクライミング協会会長・八木原国明氏をお迎えした。今年7月25日は火曜平日で、かつ大雨による参加者数減少が心配されたが、14:00ごろに高頭仁兵衛翁寿像碑がある弥彦大平園地に傘を差した越後支部会員や山仲間が40人ほど集まっていた。高頭翁の遺徳のためか天候も回復し、霧雨状態となり空も明るくなり始めたが、寿像前の芝生広場は濡れて足元もぬかるため、すぐ近くのあづまやに会場設定した。

さん、八木原さん、森庄一・県山協会長などにより厳粛に執り行なわれた。

記念撮影後、遠藤支部長の挨拶で来賓の梶さんと八木原さんを紹介していただき、梶さんから「山の日で考えてみる、山がもたらす人生の豊かさ」と題して記念講演をしていただいた。梶さんは数回のヒマラヤ登山や砂漠探検などで経験した苦労が、ビジネス分野での挑戦に対しても活かされた事例を語られた。特に「ビジネスも登山と同じで、一つの目標を征服すると次の目標を計画して邁進してしまふ癖がある」と語られたことが印象的であった。

その後、あづまやでお神酒をいただくながら一時の懇親会となり、越後の地酒を味わいながら歓談となった。16:30ごろには雨も完全に止み、弥彦山頂の奥ノ院へ移動して山頂御神廟前で開催される新潟県登山祭に参加した。17:00より弥彦神社神官による「登山安全祈願祭およびたいまつ登山清め祓い」が執り行なわれた。17:30から八木原さんより「2020年東京オリンピックと協会名変更について」と題して記念講演をしていた

だった。

講演内容は、「日本山岳協会は戦後、日本体育協会下部組織として創設、現在山登りという枠を超えて多様化している。特に若い人たちは、クライミングを時間や難度の競技的要素のスポーツとして認知し、世界各地で大会が行なわれすばらしい成績を上げている。2020年の東京オリンピック正式種目として成長するまでになった。若い人たちの情熱を育て上げ、従来の安全登山の普及、海外未知領域への冒険的登山の啓蒙などを含めてまとめていくために、日本山岳・スポーツクライミング協会に名称変更を行なった」と述べら



弥彦たいまつ登山行進

れた。文部科学省傘下にスポーツ庁が創設され、「体育」という言葉も「スポーツ」に置き換わっていくとのことで、今後「体育の日」は「スポーツの日」に、「日本体育協会」も「日本スポーツ協会」に名称変更するとのことである。

講演終了後、たいまつ登山の開始となり、責任者の越後支部役員で地元弥彦山岳会・小林頼雄会長の指示でたいまつが灯され、弥彦山頂から麓の弥彦神社を目指して下山開始する。来賓の方々にも参加していただき、雨の影響を受けたが、越後岳人約150人の大行列となった。

20:00弥彦神社本殿にて山頂からの御神火としてお祓いを受け、ボーイスカウト鼓笛隊の先導で市中行進へと進んでいた。幻想的な弥彦神社の御神火たいまつに対し、市中沿道見学者やお神輿隊も一時停止して拍手で迎え、多くの参拝者・観光客が手を合わせ、たいまつ登山隊を歓迎してくれた。夜空に打ち上げられるスターマインの花火を見ながらのたいまつ行進は、最高潮の気分を演出し楽しい時間であった。

会務報告

平成29年度第4回(7月度)理事会 議事録

日時 平成29年7月12日(水)19時00分～21時25分

場所 集会室

【出席者】小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・谷内各常務理事、安井・齋藤・星・近藤・波多野各理事、平井・石川各監事

【欠席者】大久保・清登各理事

【審議事項】

1・組織改正について

記念事業委員会、再生事業推進ワーキンググループの新設および公益法人運営委員会を改革事業推進委員会と改称することについて審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

2・評議員の選任について

以下の会員を新たに評議員とす

ることについて審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

橋本清、今村千秋、成川隆顕、野口いづみ、古野淳、吉川正幸、萩原浩司、新井梓、落合正治

3・海外登山助成金審査委員会委員の選任について

海外登山助成金審査委員会委員の選任について審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

4・平成29年度(前期)海外登山助成金審査報告について

海外登山助成金審査委員会の審査報告を受けて審議し、平成29年度(前期)海外登山助成金を以下の登山隊2隊に対し助成することとした。(賛成13名、反対なしで承認)

同志社大学山岳部「極西ネパール登山隊2017」

クライミングクラブ パルブランド「2017パルブランドインドヒマラヤ遠征隊」

5・秩父宮記念山岳賞審査委員会委員の選任について

秩父宮記念山岳賞審査委員会委員の選任について審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

6・収益事業に伴う株式会社駅前アルプスとの覚書締結について

再生委員会が収益事業の具体策の一環として検討された当会と「株式会社駅前アルプス」(名古屋市中)間でのグッズ販売に関する覚書を締結することについて審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

7・支部助成金および新入会員報奨金の送金について

平成29年7月に支給する支部助成金について会員及び準会員1名に付き2000円、新入会員等獲得報奨金を会員および準会員1名に付き4000円を送金することについて審議した。(賛成13名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・記念事業委員会の概要と委員会メンバーについて(重廣)

記念事業委員会の業務概要と委員会構成メンバーの構想について協議した。

2・今後の会議日程について(谷

内)

今年度の常務理事会、理事会を含む主要会議の日程について協議した。

3・支部合同会議の議案等について(谷内)

9月23日(土)〜24日(日)に開催される支部合同会議の主要議案等について協議した。

4・三国学生交流登山の今後について(中山)

三国学生交流登山の今後の継続について協議した。

5・入会者の増強について(永田)

入会者の増強策について協議した。

【報告事項】

1・6月受付分の入会希望者9名準会員入会希望者9名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

2・7月8日(土)開催の関東地区実務担当者のための「支部事業情報交換・交流会」(支部事業委員会主催)の報告があった。(重廣)

3・7月3日(月)開催の同好会連絡会(総務委員会主催)について報告があった。(永田)

4・7月9日(日)〜10日(月)開催の自

然保護全国集会について報告があった。(近藤)

5・『山岳』2017年の内容について報告があった。(神長)

6・『山』7月号の発行予定について報告があった。(神長)

【連絡事項】

1・東京都山岳連盟第3期役員のご案内について

2・熊本支部設立60周年記念式典および記念登山について

3・第21回ミセス・ウェストン祭記念式典開催について

【今後の予定】

1・8月度常務理事会 8月1日(火)18時30分〜 集会室

2・新旧役員懇談会 8月4日(金)19時〜 新宿中村屋

3・新入会員オリエンテーション 9月2日(土)13時30分〜 104号室・集会室

4・支部合同会議 9月23日(土)〜24日(日) 主婦会館プラザエフ

5・第33回全国支部懇談会(茨城支部) 10月13日(金)〜14日(土) つくばグランドホテル(つくば市)

ルーム目誌 7月

3日	総務委員会 同好会連絡会
4日	常務理事会 スケッチクラブ
5日	図書委員会 山行委員会
6日	YOUTH CLUB ス
7日	キークラブ 有志閑談会
9日	YOUTH CLUB
10日	フォトクラブ 二火会
11日	資料映像委員会 スキークラブ スケッチクラブ
12日	山岳研究所運営委員会
13日	理事会 休山会 山想倶楽部
14日	フォトクラブ 山岳地理クラブ 九五会
15日	フォトクラブ
18日	緑爽会 三水会
19日	総務委員会 財務委員会 スキークラブ
20日	YOUTH CLUB 三水会 つくも会

「優待サービス一覧〔第2期〕」の追加 〈会員サービスWG〉

*【関東】雲取山荘／宿泊料金の500円引き／①04941-2313338／②前記に同じ

20日	科学委員会 マウンテンカルチャークラブ みちのり山の会
21日	支部事業委員会 フォトクラブ 山の自然学研究会
25日	デジタルメディア委員会 家族登山普及委員会 遭難対策委員会
26日	自然保護委員会 麗山会
27日	00会 山岳編集委員会 公益法人運営委員会 学生部 フォトクラブ 山遊会
29日	土曜会
31日	青年部 7月来室者 463名

会員異動

物故

北林嘉鶴子(7584) 17・7・17
奥野道治 (9853) 17・6・8

退会

末岡 睦 (8443) 北海道
中井正則 (14293) 東海
石塚昌孝 (14883) 埼玉
中山春香 (16057) 東海

INFORM
O R M

インフォメーション

A I
O N

◆四国八十八ヶ所歩き遍路② 順打ち1国高知参り

山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを春秋4回の区切り打ち(2年間)の2回目です。高知県(修行の道場)の24番最御崎寺から38番金剛福寺まで順打ちします。室戸岬から足摺岬まで。歩き遍路の経験豊富な四国八十八ヶ所遍路大使が遍路・巡拝・服装等の作法はお教えします。今回からの参加、大歓迎。遍路用品は途中購入もできます。

日程 10月20日(金)～10月31日(火)

11泊12日

集合 20日(金)高知県東洋町甲浦^{かのう}駅待合室9時30分(19日(木)東京発の夜行高速バスで徳島着・JR牟岐線・阿佐海岸鉄道で20日朝着、または19日甲浦前泊)。

行程 20日佐喜浜町(泊)21日24番最御崎寺―26番金剛頂寺

行程 20日佐喜浜町(泊)21日24番最御崎寺―26番金剛頂寺

A I
O N

◆白神山地ブナ林再生事業と自然観察会

青森支部

(泊) 22日27番神峯寺(泊) 23日野須町(泊) 24日28番大日寺―30番善楽寺(泊) 25日31番竹林寺―34番種間寺(泊) 26日35番清瀧寺―36番青龍寺(泊) 27日中土佐町(泊) 28日37番岩本寺(泊) 29日黒潮町(泊) 30日土佐清水市(泊) 31日38番金剛福寺―足摺岬(解散)

歩程 1日20～30km(健脚向き)

費用 参加費1万円(通信費、写真代等)、1日1万円(宿泊代、昼食代)、遍路用品は約2万円。別途往復交通費。

定員 10名(先着順)

申込み 9月8日(金)まで 数見直

TEL 090-7204-4668

① sanko@jac.or.jp

② 090-7204-4668

③ 090-7204-4668

④ 090-7204-4668

⑤ 090-7204-4668

⑥ 090-7204-4668

⑦ 090-7204-4668

⑧ 090-7204-4668

世界遺産・白神山地のバッファ

・ゾーン周辺の生育不良杉林地をブナ林に再生するための除伐や植樹などの作業、および原生ブナ林の観察会を行なう。寝袋、食料必携。テントはこちらで用意可。

日程 9月23日(土)～24日(日)

集合 23日8時JR弘前駅城東口

および10時30分奥赤石林道ゲート

解散

24日15時奥赤石林道ゲート、18時弘前駅送迎可

経費 500円(傷害保険料等、当日徴収)

定員 30名

申込み

ハガキ、FAX(0172-447237)メール

で9月13日までに須々田秀美宛(〒03600103

平川市本町北柳田96-2

h.susuta@gmail.com)

永年会員からの寄付の報告

平成29年5月から7月までの間に149名の永年会員の皆さまから合計262万5000円のご寄付をいただきました。ここに謹んで御礼申し上げます。

(順不同、敬称略)

20万円 赤羽孝一郎

10万円 高本孝、藤野欣也、濱野吉生、小川武、久保田保雄、大塚博美、齋藤惇生

5万円 関口敏、匿名1名

3万円 高田允克、板橋元一、鈴木昭、山寺義雄、田邊壽、小林孝次、匿名3名

2万円 越田和男、的場大祐、糸原学、鈴木羊三、長尾悌夫、高村奉樹、横山厚夫、永田好行、匿名3名

1万5000円 松野賢珠、杉田博

1万3000円 青島秀夫、匿名1名

1万2000円 高橋正

1万円 伊藤博夫、小椋凱夫、宗實慶子、植西武司、村井龍一、高橋英彦、二木節夫、池場孝昌、桑原勇蔵、高橋聰、尾上昇、宗實二郎、雁部貞夫、本片山数雄、上村幹雄、金森繁三郎、岩坪五郎、酒井工夫、上尾庄一郎、小澤武麿、柳沢勝輔、山本光二、高澤光雄、関孝治、滝本幸夫、大山昭一、鈴木康仁、米川正利、加藤輝一、坂本眞生、藤本三樹雄、小林勝、野田憲一郎、畠中六左衛門、大西康郎、山本良子、山本久子、内藤修、葉師義美、本田誠也、梅野淑子、貝

森健治、田中外治、沖允人、松澤憲夫。飯島正敏、建石八重、大貫良夫、清水芳美、山口寿澄、神崎忠男、島田公博、三木亮、森山久夫、青木巖、近藤暉、塚崎義人、坂井厚、岩崎忠昭、荒木壮一、保科文人、山田一介、井口謙司、平林克敏、白木貞次、麻生国雄、土屋満、福田勝一、斎藤晋、平野征人、佐藤辰雄、橋本清、山浦源太郎、河村勝、中西豊和、菊池武昭、青木一夫、遠山博明、木戸繁良、深谷金之助、式正英、吉川仁、金井健二、平田大六、匿名19名

(1万円未満11名の氏名は省略)

『山岳』第百十二年の訂正

先ごろ発刊されました『山岳』にミスがありましたので、訂正させていただきます。とお詫び申し上げます。

*170ページ下段12行目および15行目、171ページ上段11行目、173ページ上段16行目の「黒田正輝」は「黒田清輝」に、172ページの写真説明「不落合」は「下落合」に、248ページ上段6行目「プリズム」は「プリムス」に訂正してください。

＜『山岳』編集委員会＞

◆編集後記◆

●7月末に、ある団体の講師として北ア・鹿島槍ヶ岳に行ってきた。老人介護施設で働いているという参加者の若い女性から「社会で立派だった人が、リタイアしたとたん、どうしてあんなにおかしくなるんでしょうかね」と問われました。「やはり現役のときから、生きがいとなるような遊びや趣味を持つていなかったからではないですか」と答えておきました。

●70年代後半から澎湃(ほうはい)として起こった「中高年登山ブーム」も、リタイアした中高年たちが、その後の生きがい探しとして、特段の技術がなくても比較的内りやすい山歩きを選んだからでしょう。「山」で遊んでいられる幸せを、皆さんとともにじっくりかみしめたいと思います

(節田重節)

日本山岳会会報 山 867号

2017年(平成29年)8月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社